

【與賀田チャブレンより】

様々な生徒のものを興味深く拝見させて頂きました。

それぞれに考えながら、校歌を噛みしめることは、今後の学院生活にもプラスとなることでしょう。

私は一節目から二節目の歌詞が、四季を感じさせられる点が個人的に好みです。春から秋へ、そして北斗星が輝く、冬の夜。

静けさと冷たさの中だからわかる自分の存在。

そのような自分自身を常に照らし導く存在。

校歌を熟読し解釈を加えることは、なかなか良い機会だと思います。

というのは、人間は「書く」ということを通して始めて、しっかりと「考える」ことができるからです。

皆さんが、英訳も参照しているのが素晴らしいです。

終業礼拝や卒業礼拝に、現地の牧師が参列される時、実は私も英訳で校歌を歌っています。

たとえば岡崎くんの「ともに」理解を、特務と英訳から導き出すことも正しいと思います。

とはいえども、「栄光」という言葉は主にのみ帰すものだ、というキリスト教理解があれば、もう少し理解が広がるかもしれません。

英語で言う **glory** とはギリシャ語で **doxa** (δόξα ドクサ) と言います。

この言葉は **δοκεῖν** (ドケイン) という動詞を語幹としており、「現れる、考える、知識」など意味があり、そこから「他者からの評価」へと転じます。

そしてこの他者とは、人間ではなく、神のみに帰する、というところにキリスト教的考えがあります。

つまり、人間からの評価、視線に左右されるのではなく、ただ神のみを見て生きる。

ただし、無限なる神を有限なる人間は（断片的に可能であっても）、完全に理解できるものではありません。

ですから、祈りの中で常に問うていく。現代的に言いますと、批判精神を育成していく必要がある、真の意味において「学ぶ」ということに繋がります。（自己中心化をしないために学ぶわけですね）

では何故、神以外の立教英国学院にも同じように栄光を帰するのでしょうか。

創世記にあるように、この世界は神の被造物である、という考え方があります。

神は全てのものを善きものとして創られた。

であるならば、その被造物を善きものとして運営していくことにこそ、人間の責務があるということがわかります。

そうしますと、被造物である立教英国学院において「学ぶ」ことができたことへの感謝、立教という被造物を与えてくださった神への感謝を示すものでもあります。

(ちなみに英訳にある **Alma Mater**。

これはラテン語でして、直訳しますと、自分を育ててくれる母、という意味です。

日本語だと母校、という言い方がしっくりくることでしょう。)

また、何人かの方が「平和」の意味を熟考されたのも素晴らしいことですね。

平和とは何か、愛とは何か。

それは「キリストに倣う」ということです。

中世において聖書の次に読まれた書物に「キリストに倣いて」(*imitatio christi*)という本があります。(夏目漱石もロンドン留学中に読んだものです)

倣う。真似ぶ。学ぶ。

児童・生徒の皆さんが、キリストに倣いて、真理の道を歩むことができますように。